

---

# 流星のロックマン～光輝く絆～

ペガサス・キングダム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン〜光輝く絆〜

### 【Nコード】

N1142BA

### 【作者名】

ペガサス・キングダム

### 【あらすじ】

メテオGの脅威が去ってから数ヶ月後、物語は冬休み前日から始まる。

今年は事件が多かった年なので冬休みが少なかった。しかし矢継ぎ早に事件が起きる

これに対して蒼き流星はどうするのか？  
真実を知るために少年は戦う。

## プロローグ(前書き)

どうも！作者です！

初投稿なので文章力乙ですが

未永くよろし『うつせえ！さつさとはじめる！』

．．．．．へい．．．．．

(ウォーロックめ．．．いつかこの恨み．．．)

## ブローグ

くブローグく

「ひいつ！た・助けてくれえ！」

『うつせーんだよ！守り神だかなんだか知らねえが消えな！』

『まあまあ落ち着きなつて。』

その電波体はそう言うとおもむろに槍を取り出した。

『喰らえ！』

『うつうあああああああ！！！！』

『あゝあまた殺っちゃったの？』

『ボスに怒られるよ？』

『へッ！いいんだよ人間の一人や二人』

そう言うつてその電波体達はその場から去っていった。

・・・その場に「DN」と書かれたカードを残して。

~~~~~

場所は変わり、ここはコダマタウン。



『仕方ねえな。「ありがと!」ケツ!貸しだぜ!』

「トランスコード!シューティングスター・ロックマン!」

『ちなみに、貸しだぜ!』

「・・・わかった・・・」

## プロローグ（後書き）

『ポロロン 早くわたしたちを出しなさい。』あれ、さっきも同じことだった気がするわね』

「そつだよ！はやくスバル君に告○したいのに〜！」あれ？さっき同じことだった気がする」

ギクツばれてんのか？

作者がふがいないばかりに

短編にしちゃって作り直したこと・・・

『へえ〜そんなトリックがあつたのね』

え・・・？あ、いやこれには深い理由ワケがありまして・・・

「うるさい！次話いく！」

ミ・・・ミソラちゃんコワイよお〜

というわけで前作読んだ人は大変申し訳ありませんでした。

ほんとに次話どうぞ

## 第1話 3人の転校生（前書き）

どうも！作『うつせえ！出番よこせ！』 ちょWWWウオーロックWWW  
前書きぐらいやらせ『ビーストスイング』 うつわあぶね！  
もういいや出番減らすから。

『すいませんでした！……！！……！！』

それでよろしい！

では本編スタート！



## 第1話 3人の転校生

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」

『ちなみに、貸しませ！』

「・・・わかった・・・」

(ん？この周波数は・・・！？いや、あいつらは消去(デリート)したはず・・・俺の勘違いだといいいんだが。)

「あ！あれは！」

『どうしたスバル？ 敵か？』

「あ、いや家の入り口見てみて？」

そこには大量のマスコミがいた。

『お前も大変だな』

そうつぶやいて2人は学校へと向かった

~~~~~

「ぎりぎりセーフ！」

「ぎりぎりセーフ！』『じゃないわよ！』」

「？」

「あなたのせいで私たちまでチコクしそうになったじゃない」

この人は白金ルナ。クラスの委員長を務めている。

しかしみんな本名でよばない。委員長と呼んでいる。

「そうですよ！スバル君！ぼくらまで委員長の説教に付き合わされるんですよ！」

こいつは最小院キザマロ。頭がよくて、その頭脳は高校生に負けず劣らずだけど、

背が低いのを気にしている。

「そうだぞ！スバル！だから牛井奢れ！」

この人は牛島ゴン太腕っぷしが強くて

たよりになる。でも頭が悪い。

みんな個性が歩けどみんな大切な親友だ。<sup>フレーザー</sup>

「そんなことより今日は転校生が3人も来るらしいですよ！」

「そうね・・・右も左もわからない転校生に色々教えるのも

チームルナルナ団の使命よ！」

正直そこまでしなくていいとおもっ。

するとそこで先生が入ってきた。

「みんな～席につけ～」

**第1話 3人の転校生（後書き）**

目指せ！1日5話投稿！！

てなわけで仮眠を・・・ZZZZ

## 第2話 屋上での出来事①（前書き）

今書きだめしいていますが、長期にわたって連載できない可能性が  
あるのであしからず。  
では本編をどうぞ！



その瞬間クラスが凍てついた。

「……………!?……………」  
「」

「これから一緒に勉強する3人だみんな仲良くするように！」

「え〜つと3人の席は〜」

そして教室は荒れた。

そして教室の男子「スバル、ツカサ、ジャックを除く」の眼光が鋭く光った。

「せんせ〜い！ミソラちゃん俺のとなりで〜!!」

「いやいや俺のとなりで〜!!」

「いやあんなやつらより俺のとなりで〜!!」

そんななかスバルはツカサとジャックを招いた。

「二人ともこっちおいでよ！」

「うん！」

「おう！」

そしてツカサはスバルの前、  
ジャックはとなり「左」に来た

そして爆弾は落とされた。

「私、スバル君の隣がいいです！」

「・・・だ、そうだが星河いいか？」

「ふえ？なにがですか？」

突然の出来事にスバルは腑抜けた声をだしてしまった。

「だから星河、響がとなりでいいか？」

(うつっクラスの視線が痛い・・・)

しかしスバルは勇気を出した

「あ、はい。いいですよ」

そしてミソラちゃんが駆け寄ってきた

「ヨロシクね！スバル君！」

満面の笑顔で言ってきた。

「こちらこそよろしく！ミソラちゃん！」

スバルも笑顔で返した

するとミソラちゃんの顔がほんのり赤くなった気がしたけど気のせいだ





「ふう〜あぶなかつたあ」

スバルは胸をなでおろしていた  
そのときミソラはスバルにこういった

「あ、そうそうスバル君」

ミソラがたずねてきた

「何？ミソラちゃん」

「後で屋上に来て、」

「？なんで？」

「いいからいいから」

「うん。わかった」

この話を聞いていた委員長はハツとなった  
そして2人についていくことにした

~~~~~

「起立！礼！さようなら！」

「~~~~~」

授業が終わってぼくらは質問攻めだった

「おい！星河！なんでミソラちゃんとブラザーなんだよ！  
2人に接点ないだろ！」

「そついわれるとそつだけどさ」

「別にいいじゃん！！！！そんなのどうだって！！！！！」

なんと口を開いたのはミソラだった  
そして男子達はだまつた

「もういこ！スバル君！」

「え？あ、ちよつと！」

半場スバルは引きずられていく形で教室をでていった

## 第2話 屋上での出来事①（後書き）

『勝負だ！作者！』  
なんで？

『俺が勝つたら出番ふやせ！！！』

ああ、そゆことが、

だ・が・断・る

『てめえ！逃げるのか？』

仕方ないなあ

トランスコード！ペンソールサクシャ・ノックマン！！

『おい作者！ノックマンってなんだ！？』

作者と作者のウィザードのイーノックが電波変換したのさ！

『ぬぬぬ・・・』

『（そうだ！これなら・・・）』

『そんな名前で大丈夫か？』

大丈夫だ、問題ない。

『よっしゃああああ！！！！今フラグたてたな！！！！』

・・・・・・もう長いんで次話に持ち越しますね

それでは！『あ、おい！にげるのか？』

### 第3話 屋上での出来事②

「え？あ、ちよつと！」

スバル達が教室を出てからすぐに男子達がおいかけようとしたが委員長が引きとめた

「お止めなさい！」

「どついつつもりだよ委員長！！！」

男子が言った

「どついつつもり・・・じゃないでしょ！ あなた達のせいでミノラちゃんはおこったんでしょ？」

「俺達はただ2人の関係について聞いてただけ・・・ってあ！」

「そう。あなた達は人の言いたくない部分まで深入りしすぎたのよ。」

「みんなは知っているか知らないけどミノラちゃんには両親がいないのよ」

男子達は驚きの表情を隠せなかった

「そしてスバル君にも父親がいなかった時、二人は出会ったのよ」

「どこまでいったらわかるかしら？」

「これ以上二人に深入りしないこと、わかったわね？」

そついうと委員長は教室を出て行った

~~~~~

時間は少しさかのぼり屋上

「ねえスバル君？明日ってヒマ？」

「うん暇だよ」

「じゃあさ、ドリームアイランドに新しくできた遊園地行かない？」

「あれ？ あそこって遊園地なんてあつたっけ？」

「ううん、明日からオープンなんだよ」

「へえ〜そうなんだ、じゃあいこっか」

そのタイミングで委員長が追いかけてきた  
委員長はばれないように物陰に隠れた

(なによあの二人、さっきあんなこといったけど……やっぱり  
くやしいわ)

「それじゃ8:30分にいこっか」

「うん、わかった」

「僕が迎えに行くから」「いやいいよ迎えに来なくて」

スバルは？だった

「え？なんで？」

ミソラがにっこり笑っていった

「内緒だよ」

「そう？ならいいんだけど」

「それじゃ帰ろっか」

「うん！」

「「トランスコード！！！」」

「シューティングスター・ロックマン！」

「ハープ・ノート！」

青色の光とピンク色の光が空に飛んでいった

「……やっぱり……くやしい……」

委員長はそうつぶやいて屋上を後にした



そのころウェーブロードでは

「ハックシユン!!」

二人が同時にくしゃみをしていた。

「あれ？だれかぼくらの噂でもしたのかな？」

「あはは！へんなの！」

「うん、そうだね！」

二人は笑いあっていた

第3話 屋上での出来事〜（後書き）

『もどってきたか、ノックマン』  
ん、ああもち

『続きだ!』

無理 お前じゃ相手にならん

『なんだとてめえ!』

うるさい、喰らえノックバスター!!

『グハツ つつ強い』

3分間まってやる。

『おいウォーロック〜!』

『お!スバルか! 事情は後で話す!電波変換だ!』

『え?うん、わかった』

『トランスコード!シューティングスター・ロックマン!』

おや?スバル君もきたね

では改めて……

3分間んまってやる

( (どこのム○力大佐ですか(だ)( ) )

ということ次話で〜!



## 第4話 黒き脚本家と流星の決断（前書き）

次の話でバトルにもってけそうです^^  
さあて！がんばります！

#### 第4話 黒き脚本家と流星の決断

「あはは！へんなの！」

「うん、そうだね！」

「ねえミソラちゃん？」

「なに？スバル君？」

「もうすぐ僕の家だけどさ、ミソラちゃんの家ってベイサイドシティイじゃなかった？」

「あれ？聞いてなかった？今日の転校生みんなコダマタウンに引っ越してるんだよ？」

「あれ？そうだったの？初めて聞いたよ」

スバルは心底驚いた表情だった

「じゃあみんなどこにすんでるの？」

「それはね、クインティアさん、ツカサ君、ジャック君がスバル君の家のとなりで、「あっちよっちよ」と まって？」

「なに？スバル君」

「なんでクインティア先生が引っ越してるの？」



「行こう！ ミソラちゃん！」

「うん！」

そして二人はコスモウェーブに向かった

~~~~~

「ソフソフ！ ついに来たなロックマン！ 今こそ復習の時だ！  
！」

その声の主もコスモウェーブへのポインターへ入っていった

~~~~~

そのころスバル達はコスモウェーブ経由でWAXAに向かっていた

『！！！！ スバル！！後ろだ！！！！』

「ん？なにウォーロツ……うあああああ！」

スバルは突然後ろから黒い影に襲われた

「う……ううう」

うめき声をあげながらスバルは立った  
そして視線の先には……

「ミソラちゃん！！！」

・・・そうミソラが捕らえられていた  
ファントム・ブラックによって

「ソフソフッ！さあ復讐劇のはじまりだ！」

「ミソラちゃんを放せ！ミソラちゃんは関係ないだろ！？」

「ソフソフ！ 残念だが彼女はこの舞台の悲劇のヒロインなのだよ・  
・ソフソフ！！！」

「ファントム・・・お前！！！」

「動くな！！！！！」

「！！！！！」

スバルは突然のことに動きをとめた

「動けばこいつの命はないぞー！」

「くっ・・・」

「さあエースPGMとジョーカーPGMを渡せえ！！！」

「・・・」

「さあどうした？ さもなくばこいつの命はないぞー？？」

「スバル君！私はいいいからにげて！！！」

-そして、流星は決断をくだした-

#### 第4話 黒き脚本家と流星の決断（後書き）

時間だ、答えを聞こう！

「ファイナライズ！！！」

「ブラックエース！！！」

バ・・・バカな・・・なぜ・・・

「なぜって、それはね」

「あとがきだからなんでもありなんだよ。」

なんでもあり・・・そうだ！

スバル君

ここにはここで起きた記憶を消すボタンがあるんだよ

「ふえ？」

いくよ！

それっ

ポチッ

ではまた次話で

「うつつ 僕はいつたい」

第5話 トリプルトライブ(前書き)

正直にいます。

めっちゃ強引です！

それではござぞぞ！



## 第5話 トリプルドライブ

「スバル君！私はいいからにげて！！！」

・そして、流星は決断をくだした・

「……………わかった……………」

スバルはエースPGMとジョーカーPGMを投げた

~~~~~

そのころWAXAでは

「ヨイリー博士！！！」

「なんですか！！この忙しいときに……………」

「それが……………開発中の議事メテオサーバーに、何者が……………がアク  
セスしました！」

「ロツクマンじゃなくて？」

「……………はい、おそらくファントム・ブラックと思われるです」

「わかったわ、今はそれよりスバルちゃん達に来てもらわなきゃ……………  
いい？」

「わかりました」

~~~~~

再びコスモウエーブ

『おい、スバル!! バアさんから電話だ!』

「わかった! ブラウズ!」

「スバルちゃん! 今すぐ戦闘をやめてWAXAきてちょうだい」

「え?・・・でもハーブノートがつかまったんです!!」

「そう・・・わかったわ、ミソラちゃんを助けしだいWAXAに来て頂戴」

「はいっ!わかりました」

「ロック・・・まだ完成してないけど・・・アレ、できる?」

『さあな、やってみなきゃかんねえ・・・でもやるだろ?』

「うん・・・行くよ!ロック!!」

『おう!いつでもOKだぜ!』

『「トライブPGM起動! トリプルトライブ!!!」』

そう叫ぶと同時にロックマンの周りに雷、風、炎が現れ強い光を放

った

「はああああああ！！！！！」

そして光がだんだん強くなりやがて目もあけられなくなった  
その光が晴れるとそこには……

『「トリプルドライブ！ トライブキング！！」』

「！？なにが起こっているのだ ロックマンお前はまた力を手に入るというのか！？」

「違うよ……これはミソラちゃんを助けたいという想いの……  
・絆の力だ！！」

・ピカーアアン……

光が晴れるとそこにはロックマンとハープノートの姿はなくなただ  
フロントムだけが立っていた

「くそおっロックマンめえ！とんだ見掛け倒しか……次こそ必ず  
……ンフフフツ！！」

そういうとフロントムは周波数変換でその場から消えた

「……ううん？」

「大丈夫だった？ミソラちゃん」

「うん、大丈夫、ありがと助けてくれて」

「でもスバル君、あの変身は？」

「ああ、トリプルトライブのこと？ あれはねまだ不完全なんだ、まだ見掛け倒しってところだよ」

「ところでさミソラちゃん」

「なに？スバル君」

「／／／お姫様抱っこやめていい？／／／」

「／／／！？／／／」

「／／／ふえ？あ、うんいいよ／／／」

そんな会話を交わしながらWAXAに向かった

第5話 トリップルトライブ（後書き）

・・・なんだろうこのぐだぐだ感・・・

第6話 覚悟と想い（前書き）

あああぐだぐだあ

とっときりあげて日常いっしょ！

本編どうぞ！

## 第6話 覚悟と想い

WAXAに着くと入り口でヨイリー博士が待っていた

「スバルちゃん！ミソラちゃん！詳しい事情はあと！メインコンピ  
ユータールームに来て！」

「「はい！」」

~~~~~

そこには元サテラポリス遊撃体のメンバーにクインティアが  
緊張した面持ちで待っていた

「スバルちゃん、ミソラちゃん、時間がないから手短かに話すわね」

「今シドウちゃんをジョーカーちゃんにやられた時みたいに復活さ  
せようとしてるのよ」

「でも今崩壊が始まっている・・・」

「だからあの時みたいにシドウちゃんを呼び続けてほしいの」

「お願いできるかしら」

「「はい！！」」

~~~~~

謎の場所

「ふあゝああ・・・ココどこだろ」

そこには暁シドウがいた

『わかりません・・・計測フノウです』

「マジで？」

『ハイ・・・私でもここがどこだかわかりません』

「そっかあ」

「ふあゝああっ 眠みゝなあ」

・・・シドウ！いけないで！・・・

「な・・・！？ティアの声だ！！」

「いくぞアシッド！電波変換だ！」

『わかりました、シドウ』

「トランスコード001！アシッド・エース！！」

~~~~~

「ヨイリー博士！シドウさんのデータとアシッドのデータが・・・」

「



皆は一瞬駄目だったのかとおもった……だが

「ええ……データが融合していくわ……」

「ヨイリー博士！メインコンピュータールームにトランスコード・アシッド・エースの電波変換の反応があり　ました！」

全員の期待は確信へかわった  
そして懐かしの声が聞こえた

「ウイングブレード!!!」

「……シドウ?……」

「ティア、大丈夫か?怪我してないか?」

「……え?……」

「あれ?みんななんで泣いてんだ?」

それから事情をシドウに話し……

「そういうことか!」

「みんな心配させてすまなかつた」

そして何故かスバルの家の隣に住むことになった  
そしてその帰り道

ゴン太とも分かれてスバルの家の前に2人は立っていた

「ミソラちゃん家に帰らなくて・・・い、いの？」

だんだんスバルは顔が青ざめていった

「うん！だから帰るね」

「お邪魔します！」

「・・・ただいま・・・」

「あら、お帰り二人とも、」

「スバル君のお母さん遅くなった理由は・・・」

「いいわよもう連絡きてるから」

「ホントですか？ ならよかった」

「ミソラちゃん？ ここは、もうあなたの家なんだから帰ってくる  
ときはただいまっていつのよ？」

「え？・・・」

「それにあなたはもう家族なんだから私のことも『お母さん』でいいのよ？わかった？」

その瞬間ミソラが泣き崩れてしまった

「うっうっ・・・ぐずっ」

すると茜がミノラを抱きしめた

「大丈夫よ、ミノラ」

「うっうっ……ありがとう……お……母さん」

その中で男子組みは……

（『僕ら俺ら（のこと）忘れてない！？』）

第6話 覚悟と想い（後書き）

ついに定番のアレがきますよ〜  
さあてがんばらばきかな！

第7話 ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』（前書き）

さあ今回もぐだぐだ参りましょ  
それでは本編どうぞ！

## 第7話 ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』

「へえ〜スバル君の部屋って宇宙の本ばっかだねえ〜」

「まあそれしか取り柄がねえんだけどな、スバルは」

『ポロロン ちょっとこっちこようね〜ロックちゃん』

『ああ！なんだとハー』なにかいったかしら』いいえ！なんでもありません！』

『じゃあ行きましようか クスクス』

『よろこんでお供させていただきます！』

会話を終わると2人？ の宇宙人はどこか行ってしまった

「はあ〜まさかミソラちゃんが家に居候するとは……」

「あれ？私が出るのいやだった？（上目使い+涙目）」

「うつつ嫌じゃないよ（それはずるいよ……ミソラちゃん……）」

「ところでさあ、スバル君、スバル君ってギター弾ける？」

「え？う〜んやってみなきゃわかんないや」

「じゃあはい、やってみてよ」

そういうと自分のギターをスバルに手渡した

「わかった、でもどうやるの？」

というときミソラがスバルのうしろにまわってピッタリ体をくっつけてきた

「＼＼ミ・・・ミソラちゃん！？＼＼」

「ギターを弾くには・・・まずこうやって？」

「え？うんわかった」

ポロロオン・・・

「じゃあ今度は一人でやってみて？」

ポロロオン・・・

「すごいね！ スバル君！ たった一回でそこまでできるのはすごいよー」

「これなら芸能界デビューも夢じゃないよー！」

「いや・・・僕は別にデビューしなくてもいいんだけど・・・」

このとき決まってしまった・・・

ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』

スバルがこの作戦について気付くのはもう少しあとのことである。





第7話 ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』（後書き）

ついにやってきました

王道中の王道！

スバミソ路線ですがヨロシクおねがいます！

第8話 スバル君とお風呂 ㄱ1ㄱ (前書き)

1日がおわらないいゝ

第8話 スバル君とお風呂 ①

「スバル」 ミソラ「ご飯よ」

「はい!!」

あれからスバルはギターを練習し(させられ)  
そこそこ上達したのである

「いただきま〜す!!」

今は大吾は勤務中でスバルとミソラの3人でご飯を食べている  
だが鬼とはいつ何時やってくるかわからないものだ

「ねえねえ2人と、2人も付き合ってるの？」

「／／／!?／／／」

「ゲホツゲホツ・・・か・・・母さんまだ付き合ってるよ」

「そうだよ、お母さん、まだ付き合ってるよ」

「あれ?でも、まだ、なんでしょ?」

「／／／・・・／／／」

「／／／じつ、じつさまー!／／／」

「／／／私もじつさまー!／／／」

「お粗末さま」

「あ、ミソラまって」

「へ？あ、はい」

「部屋、片付けたけど？どうする」

「スバルの部屋に・・・」スバル君の部屋がいいです！」「そう・・・なら荷物もってっちゃいなさい」

「／＼／＼は・・・はい／＼／＼」

「じゃあ布団は1つでいいわね？」

「／＼／＼は・・・はい／＼／＼」

そういつとミソラはいそいで階段を駆け上がった

「ウフフツ 可愛いんだから」

そういつと食器を片付け始めた

~~~~~

「あ！スバル君」

「ん？ 何ミソラちゃん」

「今日一緒に寝よ」

「無理」

即答だった

ミソラはOK出すと思っていたらしいが実際は違った

「え？なんで」

「僕男の子だからね？」

「スバル君そういうことする子じゃないじゃん」

「てかスバル君私のこと嫌いなの？（上目遣い+涙目）」

「うっうっ（やばいつ可愛すぎるっ）」

「わ・・・わかったよ」

「2人ともお風呂沸いたわよ」

「それともいつしよに入る？」

「「／／／！？／／／」

「／／／い・・・いつしよに入ります！／／／」

「／／／え？ちょミソラちゃん／／／」

「・・・駄目？」

「いよいよ……（じじい）で粘るとまたアレサられるからね……観  
念（じじい）」

「んじゃいじじいか」

第9話 スバル君とお風呂 〳〵

「〳〳スバル君・・・こっち見ないでよ〳〳」

「うん、わかった」

「もういい?」

「もういいよ」

「じゃあ僕着替えるからこっちみないでね」

「ウン」

「もういい?スバル君」

「いいよ」

「じゃあ入ろっか」

「・・・うん」

「じゃあ僕先からだあらっつからコッち見ないでね」

「うんわかった」

~~~~~数分後~~~~~

「じゃあミノラちゃん体あらっつていいよ」





「だって気持ちいいんだもん」

「はあ」

「もうでよつか？」

切り出したのはスバルだ

「そうだね」

そういつてふたりはお風呂からでていった

~~~~~

くスバル家の屋根の上く

『なあハープ……』

『なにガサツ……』

『ミソラってスバルのこと好きなのか……』

『あんだ今頃気付いたの？……』

『ああ……たぶんスバルもみそらが好きなんだろうな……』

『そうだといいわね……』

そうやって2人？は他愛もない話をしていた

第9話 スバル君とお風呂 ㄥㄣㄣ (後書き)

10話でおそろくスペシャルストーリーだします!.....たぶん

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1142ba/>

---

流星のロックマン～光輝く絆～

2012年1月3日03時46分発行